故郷映画人と制作映画の紹介

笠井渚　略歴

能代市に生まれ幼少期からモダンバレエを学び全国舞踊コンクールなどに出演。能代ミュージカルへの出演をきっかけに芝居を本格的に学ぶため高校卒業後上京し昭和音楽芸術学院ミュージカル科で芝居、ダンス、歌を勉強する。卒業後はフリーとして様々な舞台に出演しダンサー、振付師、役者として活躍。2006年、当時まだ日本では馴染みが少ないヨガに出会い、自分自身も心身ともに健やかで在るためにインストラクターになり現在も活動中。

『秋田県能代市に生まれて』の作成動機や仕上がりへの感想

　故郷能代の過疎化が進み出身校が合併で無くなったり、このままでは能代市自体が存続の危機なのではないか？我が街のために私に何か出来ることはないか？と考えた時に、芝居（ドラマ）を通して多くの方々にまずは能代の魅力を知ってもらうこと、何より、能代に住んでいる方々にもう一度自分の住む街の魅力に気づいてもらい共に発信してほしいと言う思いがありました。

　ドラマは敢えて観光PRというふうにはしませんでした。リアルを描きたい。最初は主人公であるナギサは田舎に対してどこかネガティブでした。あくまでもフィクションなのですが観る方がハッと何か気づいて頂いたり故郷に対して同じ思いを馳せて帰りたくなるような作品にまとまったと思います。主題歌『渚』も是非お聞きください。

加藤正人 略歴

　1954年能代市生まれ。早稲田大学客員教授、東北芸術工科大学教授、シナリオ作家協会会長、日本シナリオ作家協会理事長などを歴任。『雪に願うこと』(06)で第61回毎日映画コンクール脚本賞受賞。『クライマーズ・ハイ』(08年)、『孤高のメス』(10年)、『ふしぎな岬の物語』(14)で、それぞれ日本アカデミー賞優秀脚本賞を受賞。『水の中の八月』(98)で、第15回モンス国際映画祭（ベルギー）最優秀脚本賞受賞。代表作は、『日本沈没』(06年)、『天地明察』(12年)、『エヴェレスト　神々の山嶺』(16)、Netflix配信ドラマ『火花』(16)、『凪待ち』(19)、『破戒』(22)、『碁盤斬り』(24)など。

講演『私と映画』について

　能代に生まれて、能代で映画を観て育った私は、映画の魅力に取り憑かれて脚本家になりました。私が脚本家になるまでの経緯を皆さんに話をさせて頂きます。今回、能代の皆さんに観て頂く『破戒』という作品は、118年前に発表された島崎藤村の小説が原作です。自然主義文学の代表作ともいわれるこの原作を、現代の映画として脚色するにあたり、どんな苦労があったかということをお話しします。

『破戒』[2022年 東映]（カラー）

　企画・製作　全国水平社創立100周年記念映画製作委員会　上映時間　119分　原作：島崎藤村『破戒』脚本：加藤正人／木田紀生　監督：前田和男　キャスト：間宮祥太朗　石井杏奈　矢本悠馬　高橋和也　小林綾子　大東駿介　竹中直人　本田博太郎　田中要次　石橋蓮司　眞島秀和

(C) 全国水平社創立100周年記念映画製作委員会

あらすじ

　瀬川丑松（間宮祥太朗）は、自分が被差別部落出身ということを隠して、地元を離れ、ある小学校の教員として奉職する。 彼は生徒に慕われる良い教師だったが、出自を隠していることに悩み、また差別の現状を体験することで心を乱す。下宿先の士族出身の女性との恋に心を焦がし、友人の同僚教師の支えもあったが、学校では丑松の出自についての疑念も抱かれ始め、丑松の立場は危ういものになっていく。

　苦しみのなか丑松は、被差別部落出身の思想家・猪子蓮太郎に傾倒していき、思いがけず猪子と対面する機会を得るが、丑松は猪子にすら、自分の出自を告白することができなかった。そんな中、猪子の演説会が開かれる。丑松は、「人間はみな等しく尊厳をもつものだ」という猪子の言葉に強い感動を覚えるが、猪子は演説後、政敵の放った暴漢に襲われる。この事件がきっかけとなり、丑松はある決意を胸に、教え子たちが待つ最後の教壇へ立とうとする。